

## [最先端をひた走る]

>> 日本にシリコンバレーができない理由

# アイデアに1億円を投資するアメリカVC

独創的な技術や製品をつくるベンチャーや中小企業が続々と生まれ、そこに莫大な投資が行われることで、ビッグな企業に成長する。そんな産業のイノベーションが日本国内で活発化しないのはなぜなのか。シリコンバレーの実情に詳しいアスキー設立者でITビジネスのコンサルティング会社「ITNY」マネージング・ディレクターを務める西和彦氏は「アイデアにとりあえず1億円を投資できるのがアメリカなんです」と話している。

で同機構が民間を補完する取り組みをする中で「産業創造の好循環を生み出すしくみを作りたい」という。しかし、具体的な取り組みは依然として不透明で、莫大な公的資金を使って産業創出を図ることや、有効な取り組みができるのか、数多くの疑問が渦巻いているのも事実だ。

### 経営指導をしない日本のVC

一方、アメリカのベンチャーは活発な民間からの投資をエネルギーに大きく成長してきた。ベンチャー企業によるイノベーションが絶え間なくあり、そこに莫大な投資が行われることで新たな大企業が誕生し産業全体を活性化させている。シリコンバレーに詳しい西和彦氏は「アメリカには何種類ものベンチャーキャピタルがある。一番アグレッシブなのは起業時に投資するスタートアップベンチャーキャピタルだ」という。西氏によると、いいアイデアをもっていて会社を起こしたい人に1億円、2億円というお金を簡単なビジネスプランで出資するという。「かなりの目利き。これは日本では聞いたことがない」と西氏。

### 産業創出「民間には限界」

今年7月に発足した産業革新機構。国が820億円、パナソニックやシャープなどの大手家電メーカーを含む民間企業16社が85億円を出資して、官民の鳴り物入りで誕生した期間限定のファンドだ。その使命はオープン・イノベーションの推進と次世代の産業創出、先端技術の集約と有効活用など。日本経済を牽引してきた輸出型大手メーカーが不振にあえぐ中、新た

な産業の芽を官民で育み産業化することで経済の活性化を図ろうというのだ。バイオやハイテクなど投資先の対象はベンチャーや大学などの先端技術になる。社長に就任した能見公一氏は「ベンチャーなどへのリスク資金を国内で調達することは難しい状況だ。民間のファンドはリスクを避けるために分散してしまい、十分な資金提供がされなかったり、時間をかけた投資が行われない傾向がある」としている。そのうえ

日本では失敗が許されない





ベンチャーキャピタルの担い手も日本とアメリカとは大きな違いがあるようで、「アメリカのベンチャーキャピタルはブティックと言われる個人の集まり。だから、プロが3人、4人と集まってパートナーをやっている。日本のベンチャーキャピタルは会社が人を雇ってやっている。みんなサラリーマン。しかもそのフアンドマネージャーは経営指導をしない。最近取締役会などには行くようになってきたが、発言するのはやばくなってから。積極的に経営に参画するアメリカのベンチャーキャピタルとは大きな違いがある」と話す。

**売掛債権を担保にする  
アメリカのベンチャー金融**

ベンチャーキャピタルだけではない。銀行などの金融機関の融資の仕方も日本とアメリカとは大きな違いがあるという。日本の銀行は担保を要求し、さらに個人保証も必要だ。一方、アメリカの銀行は売掛債権を担保にして融資をするのだという。30日や60日先に支払いを受ける中小企業に対して、売掛債権があればたとえ借金を抱えている企業でも融資することが

多いという。「企業にとっては資金の回転が早くなるので月に1億円売っても、すぐに回収できる。だから、すぐ次の仕入れができる。これがすごく役に立つ」と西氏は言う。「日本の場合会社そのものがしっかりしていないと銀行は貸してくれない。そのうえ、個人保証をとられるから失敗したら大変。失敗が許されないので。海外で個人保証なんてあり得ないことです」。

金融システムを含めて社会全体で産業のイノベーションを支える取り組みを構築しているアメリカ。それがシリコンバレーを生み、企業の新陳代謝を進め経済を活性化させているのだ。一方、日本は国と大手企業が手を組んで産業創出の取り組みを進めている。その姿勢には、日米に大きな差があることを改めて認識するべきではないか。「シリコンバレービジネスのようなビジネ

西和彦氏が指摘する日米の差

	日本	アメリカ
投資	・ベンチャーキャピタルが機能していない	・起業専門などさまざまなベンチャーキャピタルが機能
銀行	・担保主義 ・個人にもリスク	売掛債権を担保に融資 ・資本の範囲のリスク
市場	基準が複雑で赤字では事実上、上場できない	・赤字でも上場可能
言葉	日本語で日本市場にアクセス	・英語で世界市場にアクセス
仕事	・会社に就職	・仕事本位で活発な転職

スを日本で一番頑張っていたのはだれかというところ、それはホリエモンだったような気がします。経営者と資本家が協力して企業の経営をする。それはアメリカのベンチャーキャピタルそのものだった」と西氏。「ライブドアの頃のホリエモンみたいなのがいっぱいいるというのがアメリカのベンチャーキャピタルのイメージ。まあ、ホリエモンは辞めちゃいましたけど私はそう評価しています」。

**西和彦**

[にし・かずひこ] 1956年兵庫県生まれ。77年アスキー設立。80年マイクロソフト新技術担当副社長。99年工学院大学大学院で博士号(情報学)取得。現在はITNYマネージング・ディレクター、尚美学園大学大学院教授。